といった博物・水産関係の刊行物が確認され、明治二十一年までは出版活動を行っている。

中でも『動物学図解』は、岩橋米太郎こと章山が、ドイツ語本を訳述兼印刷兼発行人を兼ねた書で、巻之一の「凡例」に

「曩日余父教章澳国維也納府ニ詣リシトキ該書ノ吾邦ニ有益ナルヲ知リ携帰セシ者ニシテ今之ヲ訳述シテ聊動物学ノ闕乏ヲ補ハントス」「原書ノ画図ハ石版ヲ用ユ故ニ精巧細密ヲ極ム今此書ノ如キハ則チ銅版ヲ用ユ故ニ精細ヲ尽クスヲ得ズ」

と記しており、教章歿後、章山が訳述し、図版類を銅版に附したものである。原書は類別して十五葉の図版を一巻として「九巻二十四冊」を刊行する予定であったが、「製版印刷等ニ時日ヲ重ネ出版遅延」したため、以後は巻を改め「五葉一冊・年四回」での発行を期したようだが、どうやら「巻之三上」で頓挫したようである。

『正智遺稿』覆刻本の解題を執筆して以後、神奈川県立歴史博物館の『正智遺稿記念帖』を見ることによって、「教章の明治」を改めて見直すことが出来た。それにあたり、筆者の先を行かれる野田雅子さんの多大な知見を賜り、山之内克子氏には御多忙の中、原本や日記に記された古筆記体の翻訳にお手を煩わせ、なおかつ当時のウィーンに関わる状況の御教示に対し、感謝申し上げる。また神奈川県立歴史博物館及び三重県総合博物館からの史料提供、早稲田大学図書館の存在の大きさに、改めて感謝と敬意を表したい。

金沢の戦中から戦後の幕開けへ
――萌え出る美術

森　仁史

明治一三年（一八八〇）八月、石川県に移管された金沢勧業博物館で蓮池会の初会合が催された。これは中央における龍池会に倣って、地域の有力者が「本県ノ美術ヲ振興スル」ことを目的としたもので、地方における美術団体の創設としては早かった。これと同様に、戦後の石川県の美術の再出発も尋常ならざる速さで着手された。

金沢における美術館建設については、寺尾健一が明治から戦後までを綿密に追った論考を『石川県立美術館紀要』第一号（一九八四年）に発表しているので、ここでは戦後の時代背景を含めて考えてみたい。

『現代美術　石川県美術文化協会30年史』（同会、昭和四十九年）や浅田二郎の回想『改札場のささやき』（北國出版社、昭和四十五年）、『同』Ⅱ（平成四年、北國新聞社）などに依って、事実経過をたどってみると、元北国毎日新聞社経済部長だった蒲生欣一郎が八月十七日午後同社に高光一也、相川松瑞、浅田二郎、長谷川八十吉（通称八十）、高橋勇を呼び集め、ここに列席した嵯峨保二同新聞社社長から美術館建設の提案が持ち出された。参加者全員に異存はなく、美術館施設として本多町にあった北陸海軍館〔図1〕を候補とすることにして、二十六日前記のほかに畠山錦成、鴨井悠、宮下与吉、毛藤一雄らが加わって、海

1　北陸海軍館

軍人事部を訪ねた。同館払い下げを要請したところ、個人には許可できないと言われ、石川県知事平井章を官舎に訪ね、陳情した。蒲生の回想によれば、この日の夜に陳情書と知事の添状をもって高橋と相川を海軍館を所管する舞鶴鎮守府に派遣することにしたが、復員で満員の列車に乗れず、翌朝ようやく高橋だけがデッキにぶら下がったまま乗り、十数時間後に舞鶴に着いたという。高橋はなんとか参謀長に会うことができ、金沢の依頼を伝えた。九月十一日に司令官名で許可が県知事に送られ、美術文化協会設立準備委員長に「永久無償貸与スル」書類が交付された。

彼らは恒常的な運動推進主体をつくろうとし、浅田が地元の経済界の主だった人々へ協力依頼に回り、彼らの手元にあった支那事変国庫債券や大東亜戦争割引国庫債券を集め、この額面合計額一万円を基本財産として財団法人設立に向かった。十月六日に財団法人石川県美術文化協会設立を申請し、十一日に認可された。同協会の役員構成は前頁の表の通りであった。浅田は事務長にもなった。

海軍館に展示してあった軍艦模型などは浅田に板坂辰治、吉田彰一が加わり、巡査に手伝ってもらって敷地内で焼却したが、このとき乃木大将がスッテセル将軍から贈られたピアノがでてきて、直山与二宅に運ばれた。乃木は旅順攻略で多くの犠牲者をだした第九師団偕行社に送ったはずなので、戦時中に移動してあったようだ。これは今も金沢学院大学に伝わっている。二階正面に取り付けてあった海軍のマークは浅田がデザインした地球をシンボライズした協会のマーク〔図2〕に付け替えた。

こうして、旧海軍館一階は美術館となり、そこに美術文化協会事務所が設けられた。二階は広く文化運動の場所として利用に供することになった。美術団体が

2　石川県美術文化協会マーク

役職	氏名	年齢	職	学歴
名誉会長	平井章	46	石川県知事	東京帝大
会長	嵯峨保二	47	北国毎日新聞社長	慶應義塾大中退
理事長	高橋勇	40	石川県工芸指導所長	
理事	直山与二	49	石川製作所社長	一九二九美校
	林家亀次郎	59	北陸鉄道社長	
	浅田啓次		商工経済会理事長	
	宮下与吉		北国毎日新聞専務	
	長谷川八十	36	東洋ゴム社長	
	相川松瑞	51	日本画家	一九三五美校
	高光一也	38	洋画家	県工中退
	浅田二郎	35	北国毎日新聞嘱託	一九二九県工
	毛藤一雄		北国毎日新聞	一九三五美校
監事	井村徳二	46	大和百貨店社長	
	蒲生欣一郎	36	石川県資源開発代表取締役	

財団法人石川県美術文化協会の役員構成

自前の施設を自らが運営するという画期的な体制をつくった。十月十二日目出度く石川県美術館開館式が行われ、翌十三日から二十五日まで第一回現代美術展が開催された。展覧会名は北国美術展が候補だったが、浅田の主張で全国規模の展覧会を目指して命名された。来場者が一日二千人を超える盛況となったため、会期は三十日まで延長され、総計三万九九〇四名の入場者があった。入場料金は大人五十銭、小人十五銭だった。同展は北国毎日新聞社が主催し、石川県、金沢市と美統が協賛した。出品は日本画（七九点応募）・洋画（一六二）・彫刻（四一）・工芸（一九〇）の四部構成で、入選作一三六、招待出品一五〇点が展示され、洋画招待者にはまだ疎開中だった棟方志功の名も見える。

この年末十二月十五日からは、浅田の発案で第一回歳末同情美術文化展が開催され、協会は売上五二三三円六五銭を石川県に寄付している。

発意から実現までにわずか二月足らずの間に美術館設立と展覧会開催が実現したことは全く奇跡的というよりほかないが、様々にそれを可能とする条件があったことも確かだろう。第一に多くの関係者が語っているように、金沢が戦災から免れていたため、焼け跡からの復旧に手を割かれずに済んだことが大きかった。それはハードウェアとしての都市機能―海軍館もその一例―が保存され、その再利用が可能であったこともさることながら、運動を支えた人的ネットワークもまた戦時のまま機能していた。計画の中心になった嵯峨は昭和十五年（一九四〇）大政翼賛会結成時から石川県支部常務委員であり、蒲生も同支部文化委員であった。ただ、嵯峨は大学在学中からの熱心な大本教信者で、一九五七年には大本審議会議長を務めていた。嵯峨は蒲生ら若手の計画に乗って、新機軸の舵をとろうとしたのだろう。これを地元企業経営者たちが大筋で承認したことによって、事業はスムーズに進んでいった。戦後体制がまだ全く未分明な段階で、聖戦に代わる目標を文化に見出そうとしていたのであろう。

実務を推進した高橋、長谷川、浅田、蒲生たちはちょうど壮年期の世代であり、彼らは戦争遂行に懐疑的で、戦時の後に何をどうすべきかを具体的に構想していた。長谷川は「私自身は十余年間の間に五回の召集を受けた。それをさけるために従軍作家、陸軍情報部特派員、国民新聞社特派員等の名目で、中支、北支、蒙古等逃げ廻って終戦を迎えたが、その間に日本が負ける要因を知った。」（『現代美術　石川県美術文化協会30年史』）と記している。一九四五年には実家の軍需工場の責任者に納まっていた。長谷川が工場で入手できた地下足袋やゴム長靴は農作業には欠かすことができなかったので、長野県中野町江部に疎開中だった高村豊周に美校在学中の「御恩返しをしたい」と送ったところ、「地下足袋一足で米何升と相場の物を届けてよこす。皆にも喜ばれ、こちらも大助かり」（高村『自画像』中公美術出版、昭和四十三年）ということになった。

この長谷川は高村にとって「大変な憶い出」のある卒業生だった。というのも、昭和五年（一九三〇）石川県立工業学校（県工）山脇雄吉校長から美術学校教務課に「今年入学願書を出した中に二人注意人物がいる。そのうちの一人が図案科を志望し、もう一人は鋳金科志望だが、どちらも非常な乱暴者で、……出来るなら入学を許さないで欲しい。」と書き送ってきた。鋳金科理事だった高村はこの二人が入学して厄介な学生だったら、「僕がその生徒の責任をもつ。」と教務課長に保証したのだった。この二人が浅田二郎と長谷川八十だった。高光一

也はこの前年に県工を卒業している。浅田は十年（一九三五）卒業とともに東京宝塚劇場に就職し、宝塚歌劇団や日劇ダンシング・チームの舞台美術を手掛けていた。結婚して大崎に自宅があったが空襲で失い、一時疎開のつもりで十九年に帰沢していたのだった。こうした職務体験のある浅田であったればこそ、海軍館をなんとか美術館に変身させる術ももちあわせていて不思議はない。

また、蒲生は自著『現代工芸論』（大理書房、昭和十八年、ゆまに書房、二〇一三年　寺尾健一解説）に高村の序文を求めていて、あとがきで長谷川に謝意を述べているので、長谷川に仲介を依頼できるくらいの仲であったのだろう。蒲生の戦中の仕事は「昭和十七年から加賀・越前・飛騨の国境に近い山中にケーブルを敷設し食糧増産に協力する事業と称して、あらゆる物資を豊富に公定価格で入手する組織」（蒲生『鏡花文学新論』山手書房、昭和五十一）を経営することであり、それによって意図的に徴兵を回避していたのであった。蒲生は昭和十八年年末に鴨居悠（北国毎日主筆）、八田一路（洋画家）と長谷川宅に招かれ、「えんりょのいらぬ友だち仲間」と宴を楽しんだが、こうした酒や食糧は蒲生が自らの組織を通じて入手したものだったろう。これら聖戦から距離を置こうとしていた幾人かが戦争終結を見越して、金沢で戦後に彼らなりの展望を構想していたことは十分根拠がありそうだ。こうしたなかで、「長谷川とわたくしが軍需物資入手の情報を交換しているところから、いっそ本多町の海軍人事部と出羽町の陸軍兵器庫を払い下げてもらったら」という目論見が語られていたのであった。

＊　＊　＊

これとは別に、昭和二十年九月二十二日、第四高等学校教員だった大沢衛、上田勤、伊藤武雄らが県内の文学報国会員に呼びかけ、第一回懇話会を開いた。宮本又次の研究（『金沢大学教育学部紀要』人文科学社会科学編、第30号）に依れば、会員以外の文学愛好者が集まった十月十六日の会合では、文化講座の開催、啓蒙的雑誌の発行、音楽・美術の会の開催を申し合わせた。この頃から嵯峨が支援にのりだし、十月二十七日に石川文化懇話会趣意書がまとめられた。このとき、役員が推薦で決められ、顧問暁烏敏（六十八歳）・嵯峨保二、会長伊藤武雄（五十歳）が選ばれ、総務部、文学部、評論部、研究部に六十名余りが選任された。石川県域の文化畑の殆ど総ての関係者を網羅するほどだった（西田園夫『創刊のこころ』私家版、昭和四十八年）。この手法は文学報国会と類似していたようだが、美術文化協会との関連では、研究部に宮本三郎、畠山錦成、高橋勇が選ばれていた。

十一月六日に川口久雄（石川高等師範教授）らが中心となって、第一期金曜文化講座が開かれた。また、機関誌『文華』（図3）が十二月三十日に北国毎日新聞社から発行された。創刊の辞は

「在来の文化の傾向は首都に偏在し、しかもいはゆる著名人の手になる指導的な言説が、綜合雑誌の編輯の既成概念であった。……広く文化に心を傾ける無名の士の熱意によつて民衆の心をその

3　宮本三郎『文華』創刊号表紙

ま、に雑誌に反映したいと思ふ」

と述べたが、自らの進むべき方向を明確に表明できていない。巻頭には伊藤武雄の「若き友へ」が掲載された。伊藤はカイザー『海戦』を翻訳したドイツ文学者であって、映画、演劇に詳しかった。浅田が県工生徒だった時期に、金沢尾山座で築地小劇場がこの「海戦」を上演し、浅田は舞台を見たが、「ワァワァ〝速口〟でドナッてばかりいて、訳がわからずじまい」だったと言う。伊藤のエッセイはアンドレ・アントワーヌの自由劇場の意義を長々と解説し、「僕等には日本人にとつての本来の生き方、感じ方、考へ方があるはずである。僕等はそれを見失つてはならない。諸外国から押しつけられる『こしらへ物』の世界のなかで…僕等も英雄的な戦ひを戦はなければならないのである。」と述べ、日本の旧体制と対峙しようとしているのかどうかすらひどく不分明な内容であった。

『文華』創刊号に掲載された同会の最初の規約では、「新日本文化に寄与すを以て目的とす」としており、これでは殆ど何を目指そうとしているのかが分からないが、それは中央と同様に、石川の有識者たちが天皇制イデオロギーに替わるべき原則を見出しえていなかったとしなければならない。さすがに、翌年四月二十一日に規約は改正され、

「会員相琢磨して自らをただし、広く文化を愛する同志に呼びかけて、相共に民主主義文化の研究および創造に努力することを目的とする。」

と変更された。時流をみて民主主義を掲げたものの、石川県文化懇話会は旧体制の枠組みとそれを支えてきた文化的教養主義に替わるべき指針を打ち出すことはできなかったと言える。美術文化協会における実行部隊にあたる階層が伊藤らにとって代わることがなかったのだろう。このため、どうしても次代の展望を自らが語ることは難しく、刺激的な論説は中央の論客―小田切英雄、清水幾太郎、細川嘉六、森戸辰男、中野好夫、柳田謙十郎ら―によるものであり、創刊の辞に全くそぐわない皮肉な事態となっていた。このてんで、懇話会と美術文化協会がともに敗戦後の日本文化再建に取り組もうとした団体でありながら、その成果と方向で大きな落差が生まれていた。すなわち、いずれも戦時体制に依拠しながら次代に踏み出そうとしたのだが、戦前の文化・システムの継承なのか不信・断絶なのかの差があったように思える。

しかし、美術文化協会のこうした奮闘にもかかわらず、金沢に進駐した駐留軍に旧海軍館の明け渡しを求められ、県から四万円の移転費を得て、十二月三十日には建物を明け渡し、兼六園内の旧商品陳列所に移転することになった。だが、この旧陳列所は翌二十一年二月に焼失してしまい、協会はわずか半年の間に活動の拠点を失うことになった。

戦時に抑圧されていた左派も活動を再建しようと立ち上がった。昭和十年（一九三五）金沢で結成された演劇集団、北陸新劇協会である。『劇団北陸新協50年の歩み』（同劇団、一九八四年）に依れば、彼らも二十年十一月頃から劇団再建に取り組み、翌年

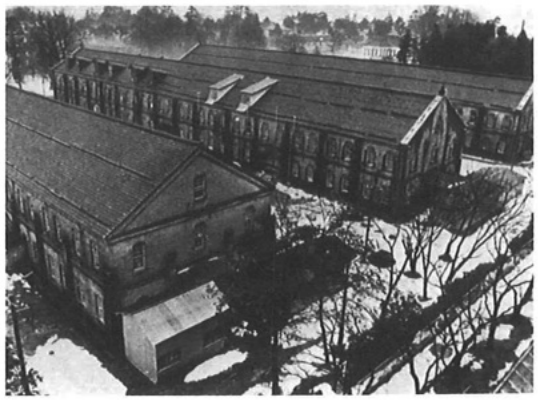
4　山本有三「人間の冠」舞台

三月に復活第一回公演（チェーホフ「熊」、山本有三「人間の冠」）を尾山倶楽部で開催した。舞台装置〔図4〕は浅田が担当した。この活動もまた嵯峨は積極的に支援し、中心人物に給与を支払ったり、新聞紙面で彼らの活動を積極的に報道したりした。彼らはこの年に七回の公演を挙行し、意気盛んであった。労働組合運動が復活すると、国鉄を筆頭に職場活動として劇団が結成され、演劇人口は急激に増加していくのだった。

＊　＊　＊

石川県美術文化協会はもう一つの目標とした美術学校の設立に注力することになる。二十一年二月頃、長谷川らが平井県知事に畠山の色紙を持参してあいさつに出向いたとき、美術学校設立を切り出した。たまたま県議会議長から市長に転任していた武谷甚太郎が同席し、市の事業として取り組みたいと意欲を燃やした。武谷は県教委指導主事だった津沢佐正を市に招き、同月新たに設けた文化部の部長に起用した。武谷は二月十九日市議会で美術専門学校（美専）の設立と総合大学誘致を表明した。文部省の新制国立大学設置の方針が明らかになる二十三年までは、北陸地区には一つの総合大学しか認められないのではないかという観測が一般的だった。市議会は市長提案に賛成し、準備金十万円の支出を承認した。これを受けて三月五日、石川県美術文化協会は役員のなかから畠山錦成、宮本三郎、長谷川八十、高橋勇、北出塔次郎、木村雨山、小松芳光、毛藤一雄、浅田二郎、蒲生欣一郎を金沢美専設立委員として市の嘱託とすることを決定した。五月二十五日金沢市は文部省へ金沢美術専門学校（予科一年、本科三年）設置を申請した。この時点では校長が決定しておらず、森田亀之助に確定してから、七月四日に文部省に追加書類を送付した。これに対し、文部省は七月十三日金沢美術工芸専門学校として専門学校設置を認可した。変更は校名だけで、専攻（定員）は申請通り、日本画（15）、洋画（20）、彫刻（10）、陶磁（30）、漆工（30）、金工（15）で構成された。

石川県は美専敷地として最初偕行社（現在、東近美工芸館移転先として候補に挙がっている。）を勧めた。美術文化協会は兵器倉庫から師団長官舎までの敷地を要求したが、三月二十二日に三棟の煉瓦造倉庫部分のみの割り当てられた。金沢市は高等教育機関の設置は初めてであったので、津沢の指揮のもと浅田も建築課に製図机を与えられ、二か月余りの間に改築を終えた〔図5〕。



5　金沢美専校舎

指導者として校長を誰にするかが大きな問題だったが、高村豊周が候補に挙がり、武谷が打診のため二度上京した。高村は一旦は承諾したものの、最終的に辞退し、代わりに当時美校敷地内に疎開していた森田亀之助が推挙されることになった。長谷川の証言によれば、鴨井悠も候補に挙がったが、森田を三年間校長とすることで落着した。六角紫水を推薦する動きも出たようだが、美術文化協会はそれに抵抗したようだ。申請時点で決定していた教員は次のような構成であった。専

門教員十五名のうち十一名が東京美術学校卒業生によって占められており、いかに金沢市が既存の権威に頼ろうとしていたかはあからさまだった。あるいは、美術文化協会の中心メンバーが美校出身であったために、これ以外に選択の余地がなかったことのほうが決定的だったのかもしれない。この学校が昭和二十五年（一九五〇）短期大学となり、三十年（一九五五）に大学に組織改編されて今日に至っている。

金沢美校申請時構成教員

氏名	担当	年齢	学歴	
森田亀之助	美術史、美学	61	美校	
畠山錦成	日本画	50	美校	申請時点で記載
原田太一	〃	41	京都絵専	
宮本三郎	洋画	43	川端画学校	
八田一路	〃	48	文化学院	
都賀田勇馬	彫刻	55	美校	
長谷川八十	〃	39	美校	
矩　幸成	〃	44	美校	
高村豊周	工芸史、金工	59	美校	
高橋　勇	金工	42	美校	
津田久米次	〃	51	美校	
太田誠二	漆工	58	美校	
小松芳光	〃	44	美校	
佐治　正	〃	34	美校	
北出塔次郎	陶磁器	49	同志社大学	

太字は美術文化協会役員

『明治絵葉書資料集』―ある書き付け冊子から

山田　俊幸

明治時代の切手（郵券）やスタンプ趣味（エンタイヤなど）については、明治末あたりから、研究者というよりも愛好者によって、さまざまに探求、整理され、記述もされてきている。そうした業界雑誌もあるが、けっこう仲間内にとどまったものもあり、それらを統一的に見通すことはなかなか難しいものの、けっこういろいろな場でそれらに出会うこともある。それに対して、絵葉書となるとそんなものではない。研究や、整理された絵葉書情報がないのである。言うまでもなく、「絵葉書」の研究は緒に就いたばかりなのだ。先行文献やたしかな歴史の記述が少ないのも、仕方がないのかもしれない。

そんな思いをしていたとき、ちょっとおもしろい書き付け（メモ）冊子を見つけた。記載が、三十七八年戦役の郵便切手のことを、「明治参拾七年戦役紀念郵券」と戦争途上の記載としているところから、その時期（明治三十七年から四十年前後）に成立したものと思われる。毛筆書き。もちろん郵券中心の書き付けだが、わずかながら「絵葉書（はがき）」についてのメモもある。これらは、絵葉書の歴史をさぐる、ちょっとした手引きになるだろう。そんなことから、その書き付けを、『明治絵葉書資料集』と名付けてここに紹介する。

どの世界でも先達はいるものだ。

一寸

第六十八号　二〇一六年十一月

第六十八号目次

新・旧刊案内68　青木　茂　1
情死風俗と昭和世相・狗仙人栗田万次郎補遺・浅井忠カタログレゾネその一　など
山高登の初期表紙版画　岩切信一郎　8
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（23）　大谷　芳久　15
旧植民地の図画教員　旧樺太州・南洋庁　金子　一夫　39
谷内六郎余話　丹尾　安典　46
岩橋教章雑録（三）　銅・石版画遺聞64　森　登　56
ウィーン修学の内容と文会舎
金沢の戦中から戦後の幕開けへ　森　仁史　75
―萌え出る美術
『明治絵葉書資料集』―ある書き付け冊子から　山田　俊幸　81

新・旧刊案内68

情死風俗と昭和世相・狗仙人栗田万次郎補遺・浅井忠カタログレゾネその一　など

青木　茂

■本誌前々六十六号の情死（心中）考は評判が悪かったようである。大道和一が『情死の研究』で定義した「心中とは相愛する異性間の合意に成る両者の自殺なり」といった古典的な純情など、現代でははやらないのに、研究なんて無意味だというわけである。とはいえ、情死考を書いていた最後の頃、この五月九日夜に中学二年の女子二人が理由なく東急大井町線の駅ホームから手をつないで急行電車の前へ身を翻えし飛び込んで死を遂げたという事件があって、爽やかなすがすがしい死の姿だと思った。

『太平記』に六波羅滅亡の時、越後守仲時以下「都合四百三十二人、同時に腹をぞ切たりけり」のなかに同人岩切さんのご先祖の潔い姿があったという。鎌倉滅亡のときはもっと多くの自刎があったと思うが、この集団自決は戦国時代に多発し、果ては会津飯盛山の少年白虎隊となる。降伏を肯じないというのを武士道とは死ぬことと俗説化し、第二次大戦の特攻隊となり、沖縄線での強制された民間人の集団自決すら名誉といい忠義といった。いっぽう頻発した百姓一揆の伝統は明治になって各地の血税騒動を経たのち、秩父困民党事件となり自由党を乗り越えて猟師・やくざを含む自治政府のごときものを形成する。こ